



アメリカにおける精神衛生運動と教育 : アドルフ・マイヤーの精神衛生論を手がかりに

楊, 鋳
白水, 浩信

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5(2):47-54

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003903>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003903>



アメリカにおける精神衛生運動と教育
—アドルフ・マイヤーの精神衛生論を手がかりに—
The Mental Hygiene Movement and Education in USA:
Adolf Meyer's Mental Hygiene Theory

楊 鋁* 白水 浩信**
YANG Zeng* SHIROZU Hironobu**

Abstract: This paper attempts to study the mental hygiene movement and its influence on the education in US. In this study, the author investigates into Adolf Meyer's mental hygiene theory and educational discourse. Firstly, the goal of psychiatry to reform the society better made family and school the main battlefield. Then, according to Meyer, the main cause of mental disorder was habit disorganization, which was due to the environment, such as family and school. The family was not only a hygiene institution, but also 'the institution of reciprocal education'. Finally, through analyzing of Meyer's educational opinion, School must be a place for the healthy growth of as well as habit development of Children. In conclusion, Meyer's mental hygiene theory rehashed the traditional theory of 'habit formation'. Habit formation was used again as a way of prevention and treatment. The setting goal was to help people adjust to the society. Therefore, the study offers the clue to understand the 'medicalization' in today's education.

1. はじめに

「医療化」と呼ばれる現代社会の一つの特徴は、本来非医療的な問題が病気あるいは障害という視点から病理化されることである¹。この状況は社会の様々な分野を覆って進行しているかに見える。教育現場では、学校に適應できない子どもは、「心」の専門家によって、「LD (学習障害)」、「ADHD (注意欠陥多動性障害)」などの発達障害として取り扱われる²。さらには、すべての子どもが発達障害の予備群として、予防の対象として見なされる。「精神衛生 (mental hygiene)」は、今日、喫緊の課題というわけである³。

しかし、今日の「心」の問題の過大視は、何も新しい事態ではない。その直接の歴史的契機は、少なくとも 1908 年にまで遡るアメリカの「精神衛生運動 (mental hygiene movement)」にまで辿ることができる。その運動は当初、知的障害者の待遇改善から始まり、やがて家族や学校における子どもの教育に大きな影響を及ぼすに至る⁴。爾後、アメリカの教育界では、「心」を重視する傾向がますます顕著に現れてくることになる。

このようにあらゆる問題を解決する際に、医療的な視点を優先させる傾向は、教育の「医療化」と称される。すでに、S・コーエンは、精神医学が「精神衛生運動」を通して、学校教育の隅々にまで浸透し、次第にアメリカの教育を「医療化」させたと指摘する⁵。

かくして、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、精神医学は「精神衛生運動」を領導し急激な拡大をみせた。その際、精神衛生論者が提唱した運動の使命と役割とは、果たしていかなるものであったのだろうか。また、この「精神衛生運動」が、アメリカの教育に与えた影響とはどういったものであったろうか。そして、精神衛生運動がめざした、「心」の病の予防と治療の具体的実践はいかなるものであり、どのように展開していったのだろうか。

本稿では、これら精神衛生運動の基本的性格を明らかにし、その歴史的意義を規定しようとするものである。コーエンも指摘しているように、精神衛生運動は進歩主義教育運動にも深く関わっており、教育言説を「人格発達 (personality development)」を軸とした言説へと転換させた契機であり、教育の医療化の展開を理解するための重要な手がかりになる。

その端緒として、本論では、精神衛生運動の指導者であり、アメリカの精神医学に新たな指針を与え、現代まで影響を及ぼしているアドルフ・マイヤー (Adolf Meyer) を取り上げる。実際、彼は、一方では「精神衛生」の理念を提唱することによって「精神衛生運動」を推進し、他方、学校教育についても大いに発言しながら、精神医学と教育との連携を図ることによって精神衛生という見地に立った人間形成を真っ向から論じているのである。

* Research Center for Chinese Social Transformations and Social Organizations, Shanghai University: Lecturer

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授

(2011年9月30日 受付)
(2012年1月16日 受理)

このようにマイヤーは、精神医学史研究においても、しばしば注目されてきたアメリカ精神医学の立役者の一人である⁶。マイヤー研究の第一人者、R・レイズは、マイヤーとE・B・ティチナーの書簡を蒐集し、草創期のアメリカ精神医学史界の再構成を試み、マイヤーにおける個人史的アプローチがいかに成立したかについて考察している⁷。特に近年の先行研究では、社会史、科学史の分野から精神衛生運動とマイヤーに関し、精神疾患の治療と予防が病院からコミュニティへと広がっていくプロセスを解明したものが現れてきており興味深い⁸。とはいえ、なお、マイヤー精神衛生論とその人間形成観を正面から扱うには至っていないのが現状である⁹。

他方、教育史研究に目を向けると、「アメリカ教育史の里程標」と称されるL・A・クレミンの『学校の変容』のなかには、すでにマイヤーについての先駆的言及はあるものの¹⁰、本格的に注目し始めたのはクレミンの弟子コーエンである。コーエンは、マイヤーが「早発性痴呆症(dementia praecox)¹¹」の研究を通して、精神医学と教育の関係に新しい方向性を与えたと指摘する¹²。そしてこの早発性痴呆症をはじめ、精神疾患が治療より予防を優先すべき病気だと確信するマイヤーは、それまでの精神医学と教育学との境界を乗り越え、両者の緊密な連携を図っていくとするのである。

しかし、マイヤーのいう治療と予防とは具体的にはいかなる性格のものであり、教育との連携といわれる実践の本質はどこにあったのだろうか。先行研究はその詳細について、なお明らかにしていない。これらの点を明らかにするためには、マイヤーの精神衛生論とその教育言説をさらに精緻に読解することが必要となる。本稿では、『マイヤー著作集』(全4巻)を主たる史料として用い、その精神衛生論と教育言説を具体的に析出していくことを課題とする¹³。従来、日本の教育学研究では、ほとんど触れられてこなかったマイヤーの精神衛生論と教育言説に焦点をあて、20世紀アメリカにおける教育の医療化の生成を具体的史料に基づき、跡づけていくことにしたい。

2. マイヤーにおける精神医学の使命

さて、「精神衛生運動」と教育の医療化にとって重要な役割を果たしたマイヤーの精神衛生論を分析するに先んじて、教育学研究ではほとんど知られていない彼の略歴について述べておこう。マイヤーは1866年にスイスに生まれ、チューリヒ大学の医学部を卒業した後、医療実務に携わる。1892年に彼はアメリカに渡り、シカゴ大学などで神経学の基礎研究をはじめた一方、臨床分野でも病院改革において高い評価を受けている。

折しも1894年にデューイはシカゴ大学に招聘されている。このことがきっかけで、マイヤーはデューイと友誼を得ることになる[XIII, CP3:471]。この頃から、彼はプラグマティズムの影響を受けることになるのだが、例えばマイヤーの提唱する「精神生物学(psychobiology)」の基本的考え方などは、Ch・S・パース、W・ジェイムズ、J・デューイ、G・H・ミードらの思想に拠るところが大きい[XI, CP3:64]。晩年になっても、彼はデューイらとの交友関係にふれ、プラグマティズムとアメリカの精神医学の協調関係を印象づける。マイヤーにとって、プラグマティズムは人間の「生」の倫理を精神医学に与えるのみならず、「生」の混乱を防ぎ、これを矯正する具体的方途をも照らし出したのである。マイヤーによる精神

衛生運動の出発点は、プラグマティズムと軌を一にしていたこと、このことは強調しておかなければならない[XIII, CP3:471]。

20世紀に入り、著名な精神科医の名声を得たマイヤーは、1902年から1910年にかけて、ニューヨーク州立病院病理学研究所の主任を勤め、1904年から1909年にかけて、コーネル大学医学部の精神病理学教授をも兼任し、1907年にピーアスを後押しし、後に「精神衛生運動のバイブル」とまで言われた『我が魂にあうまで』を出版させるに至る。このことをもって「精神衛生運動」の嚆矢とし、「精神衛生」という理念でもって、運動の主旨を総括したのも、ほかならぬマイヤーその人であった¹⁴。1910年にマイヤーはジョンズ・ホプキンス病院の精神科主任として招聘され、ヘンリー・フィップス・クリニックを立ち上げ¹⁵、ここで1941年まで勤務している。このときすでに、ジョンズ・ホプキンス病院はアメリカ精神医学研究の牽引役となっていた。

このようにアメリカ精神医学の発展に偉大な足跡を残したマイヤーの没後、『著作集』が1950年から2年間かけて、陸続と刊行されていった。精神医学界における彼の功績は、特に精神生物学の創始、パーソナリティ研究への個人史的アプローチの導入、さらに「社会精神医学」および「地域精神医学」の創出が挙げられる¹⁶。

では、マイヤーにとって、精神医学は、いかなる役割を果たすものであったのか。この問題について、彼は1921年5月に高名なブルーミングダール病院の百年記念行事で行った「生の問題を理解する精神医学の貢献」という講演において、詳しく論じている。彼によれば、中世以来、「肉体」の罪悪と永遠に対立する存在としての「魂」の世界が君臨した。この引き裂かれた身体と心の統一を取り戻したのは、19世紀の実験科学の功績であるという。彼によると、それまで「心」についての研究は誤った基盤の上に築かれていた。なぜならば、当時、なお多くの科学者が、「魂(soul)」や「精神(spirit)」の固有性に彩られた宗教的世界像に支配されていたからである。そこで、マイヤーが目指したのは、こうした混乱を徹底的に終焉させることであった。彼は次のように精神医学の誕生の歴史を回顧する。「結局、非科学的な偽りから守られるためには、われわれは、「魂」を用いない心理学の段階を通過しなければならなかったし、その後には「意識」という語さえ用いない心理学を通過しなければならなかった」[VIII, CP4:2]。つまり、マイヤーの考えにしたがえば、精神医学は、近代における人間の「生(life)」に関する問題解決のために、まず既存の宗教がもたらした「魂(soul)」と「精神(spirit)」という考え方を完全に斥け、活動と機能としての「心(mind)」の科学を樹立するものでなければならなかったのである。

この考えに基づいて、マイヤーが提示した「精神生物学」的な「心」とは抽象的思弁ではなく、生命の具体的状況、要因、問題と深くかわりながら身体において統一されているものにほかならず、この意味でプラグマティズムの心身観と符牒が合う¹⁷。つまり、人間とは、心と身体の一統体としてみなされなければならないのである¹⁸。マイヤーにとって人間を対象とする精神医学がなすべきことは、「統一体としての人間の生命」の研究にある。そうだとすれば、精神医学は生命の状態やその原因といった、生命そのものの問題を研究するものであり、まさに「生」を配慮する学問でなければならない[XIII, CP4:4]。

このような視座に立って、マイヤーは人間的生のすべての状況、

内容、問題が精神医学の研究領域であると設定する。例えば、精神疾患の病因について彼は、「われわれの患者は、単に抽象的な心において不健康ではなく、むしろ現実の生活様式が、患者の心、全体的な有機体とその行動を危機に追い込むことによって病気になる」と述べている [VIII, CP4:2]。つまり、マイヤーによれば、「生」について研究する精神医学は、「人間のすべて」、個々の患者についてのすべて、即ち、「社会的な存在」としての個人史のすべてを明らかにしなければならないというわけである [VIII, CP4:5]。

こうして「生」のすべてを包括しようとしたマイヤーの精神医学が、子ども、そして家族を重要な研究対象とし、次第に学校教育の現場へと「貢献」しようとしたのは、ごく自然な成り行きである。マイヤーは、「精神医学は、現実の共同生活の競争のなかで、子どもと母の関係、子どもと父の関係、そして母と父の関係、兄弟、仲間、コミュニティとの関係における被験者としての子どもについて、新しい見方と理解を広げてくれる」と自負し、その功績を強調している [VIII, CP4:6]。

このように、精神医学の対象領域を「生」のあらゆる局面に拡大したマイヤーは、精神医学の使命について列挙している。彼にしたがえば、精神医学は、家族における人間関係の新たな理解と「社会的良心における新たな倫理的目標」を提供し、また、科学の進歩に伴われて、かつての宗教の役割を果たし、さらに法律の分野にも貢献できるものであると豪語する [VIII, CP4:6-10]。なぜなら、精神医学は人間における人格の多様性と差異を実効的に取り扱うものであり、そうであればこそ人間の制度を正しく導き、また補強するものになると期待されていたからである。

これらの目標は、マイヤーにとって、精神衛生運動を通して、精神医学がまさに社会全体の改造につながる壮大な役割を担っていることをも意味する。つまり、精神医学は社会改造のための具体的な理念と方法を与えるものにほかならない。こうした社会改造を志向する傾向は、「アメリカ革新主義期」と呼ばれる時代に共有された特徴でもある。当時、都市化、産業化による矛盾の噴出という社会状況に対して、さまざまな社会改造論が提起されており、特にマイヤーの念頭にあったのはデューイの議論である。彼の精神医学による社会改造の構想は、デューイのいう「教育は社会の進歩と改革の基本的な方法である¹⁹⁾」という教育による社会改造と符合する。デューイが『民主主義と教育』において宣言した、「生命に必要なものとしての教育」と同じように、マイヤーは精神医学を社会改造の方法の一つとして構想し、精神医学を「生命に必要なもの」として位置付けようとしたのである。その意味で、精神衛生運動とその革新主義期における教育運動、すなわち進歩主義教育運動は、同じ目標を共有していた。しかも、精神衛生運動は次第に学校教育に強い関心を示していく。すなわち精神衛生論者は、教育による社会改造と歩調を合わせ、学校をその具体的な主戦場と目したのである。これらの目標を確実に実現するために、マイヤーは、まず教育に着目し、人間形成の重要な場としての学校と家族に目を向け始めたのである。

3. 社会適応と習慣

さて、マイヤーが学校と家族に注目するのは、次の3つの視点からである。(1) すべての子どもは精神疾患の予防の対象である。(2) 家族は精神疾患にとって決定的な場である。(3) 学校は精神疾患を

発症させる温床である。このような立場は、「社会適応と習慣」という彼の基本的モチーフにそって、長期にわたって、一貫して主張された。以下、それぞれの論点にそって、マイヤーの議論を敷衍しておくことにしよう。

まず、すべての子どもは、精神疾患の予防の対象とされている。これは、既述した通り、「生」のあらゆる面を配慮しようとした精神医学の使命から直接導かれるものである。さらにマイヤーは、早発性痴呆症を行為と行動の欠陥として捉え、心の生活にとって基本的かつ決定的な習慣を形成することができると期待する。このような病因論は、必然的に、精神疾患の予防を子ども期の習慣形成の問題に収斂させていくことになる。例えばマイヤーは、精神疾患もまた、他の身体的疾患と同様、「潜伏期」があると考えた。この「潜伏期」とは、「習慣障害」という形で観察され、精神疾患の兆候であるとされる。それゆえ彼は、この「潜伏期」、すなわち「習慣障害」の段階でこそ、「予防的働きかけ (prophylactic work)」が行われるべきだと主張する。

次に家族という成育環境こそが、子どもの精神疾患を生じさせる決定的な場なのだという認識が示される。こうした認識は、若きマイヤーがスタンレー・ホールの指導した子ども研究運動に参加した頃から、すでに得られていた。その重要な成果として、1895年に新たな「力動的精神医学」の創設に際して3つの論文が著された。「子どもの異常についての観察」[I, CP4]、「初等教育段階の子どもの精神異常」[II, CP4]、「子どもの精神異常研究のための行程」がそれである [III, CP4]。ここでは、特に「子どもの異常についての観察」を中心に、マイヤーの家族に関する認識を読み解いてみよう。

それまで、一般に「精神的、道徳的異常の固有原因としての遺伝」が重視されてきたが、マイヤーは遺伝のみを強調することに警鐘を鳴らす。彼は次のような実例を取り上げ、遺伝決定論に反論しようとする。殺人罪を宣告された父がいるが、彼の2人の娘は無事に成長を遂げた。ところが、謹厳な老夫婦の孫は、遺伝的問題がなかったにもかかわらず、後に罪を犯し、やがて狂気で精神病院に入院したという。マイヤーはこの例に鑑み、遺伝という要因は無視しうるものではないが、かといって遺伝が必然的に精神疾患を発症させるわけではないと主張する。逆に遺伝的要因がなくとも、精神疾患を発症する危険性もあると注意を喚起し、「養育と教育、すなわち環境の影響を重視しなければならない」と結論づける [I, CP4:326]。こうして彼は、遺伝決定論を否定し、「適応能力」と「習慣の確立」こそが遺伝的問題を修正し、改善できるものと確信するにいたる [I, CP4:328]。

そして既存の学校が子どもの精神疾患を発症させる温床となっていると認識されている。すでに明らかのように、マイヤーは精神疾患の原因として成育環境を重視していたのだから、学校もまた精神医学の重要な働きかけの場と見なされたのは言を俟たない。

この点に関して、マイヤーの考案した早発性痴呆症の治療法についての議論は示唆に富む。彼の早発性痴呆症に関する論文は多くあるが、特にこの疾患と習慣異常 (habit disorder) の関係を最初に言及したのは、1905年に発表した論文である [IV, CP2:421-431]。そこでマイヤーはクレペリンの考えを批判し、早発性痴呆症が新陳代謝の混乱や何らかの遺伝に由来する病気ではなく、やはり、「習慣異常」が原因である病気と結論づけた [IV, CP2:422]。この論文は

1912年にも再刊行されたが、3年後に彼は、「精神的欠陥と精神障害の予防は、何を目標とすべきか？」という論文において、さらに、習慣異常の要因を探ろうとした[VI, CP4:191]。マイヤーによれば、子どもの「習慣異常」は、既存の学校教育にその原因を求めなければならない。その根拠として彼は、精神科医キャンベルの調査結果を引証し、少なくとも10%の子どもが公立学校のカリキュラムに適應していないことは明白であると述べ、学校システムそのものの問題性を告発する[VI, CP4:191]。つまり、学校カリキュラムは、子どもに多くの不適応を起させているというのである。相当数の子どもが、まず学校で挫折し、失敗してしまっているのである。

マイヤーは、早い段階からこうした学校における挫折体験がもとで精神疾患を発症してしまった症例に注目している。先にふれた1905年の論文では、マイヤーはすでに患者の個人史を取り上げながら、学校における挫折体験に着目する。例えばC・Hという女性は、7才から学校に入り、機敏でよく適應できたが、11才から成績不振に陥る。彼女は教師になることを希望していたが、退学によってそれはかなわぬ夢となった[II, CP2:423]。また精神衛生運動が始まった1908年に、学校衛生協会(ASHA)の集會に寄稿した論文では、学校では気後れし、非常に内気であり、10歳からマスターベーションをしているL.M.という少年や、「愚鈍で、空想癖がある」という少女等が相次いで例示されている[V, CP4:343]。

こうした学校での失敗、不適応から、結局社会への不適応にまで発展したケースが取りざたされる。例えば、先のC・Hという女性は、その後、社会常識に反する行動を繰り返した。このような「習慣破壊(habit disorganization)」へと至る葛藤、緊張、矛盾を生じさせているのは、個人史という観点からみれば、現在と関係づけられた「過去」とであるとされる。1916年にシカゴに設置された教育関連委員会において、マイヤーは「建設的な学校プログラムにおける精神的・道徳的健康」というテーマで講演を行った。そこで、過去における失敗や不適応は再び新たな失敗を引き起こし、現在の不適応をもたらすという考えをあらためて示し、強調している[VII, CP4:352]。この講演をもとにした論文は、1917年に『教育に関する現代科学の示唆』という著作に収録され、5回にわたって増刷され、さらに1946年には国家精神衛生委員会によって再刊された。20年もの長きにわたって刊行され続けたこの著作は、学校と習慣破壊の関係性を強調するものであり、精神衛生上、望ましい学校建設の綱領として読み継がれていったのである。

以上のように、マイヤーが一貫して主張しているのは、従来の学校が子どもの習慣を破壊し、結局のところ、社会への不適応を起させる主要な場であるという認識である。しかし、マイヤーの重視する「習慣破壊」とは、具体的には何を指していたのだろうか。まず身体的には、「神経質な子どもの特徴的な習慣」とされる爪を噛むこと、小便失禁、口を通してのみ呼吸すること、頭痛、痙攣、不眠等が取り上げられる[III, CP4:339]。さらにまた、学校生活でよく観察されるべきなのは、食事と消化状態の習慣、睡眠と目覚めの習慣、活動の習慣等である。その上、身体の諸機能に関する習慣だけではなく、注目されたいという自己顕示や集団行動における社会性の不足にまで筆は及ぶ[VII, CP4:357]。彼が注意を喚起する「習慣破壊」は、身体から精神的なものまで極めて多岐にわたっている。

とりわけ、マイヤーが注目した「習慣破壊」の一つは、極端な空

想や非現実的なものを好むという思考の習慣である[V, CP4:344-345]。「批判的で取り留めのない思考の習慣は、空想、神秘主義、宗教、非現実的なもの同様、現実世界における進歩的活動に即して働くということへの無関心によるものである。私はこのような思考の習慣の欠点を強調したい」[IV, CP2:429]。

すなわち、マイヤーにおいて、早発性痴呆症における最大の問題は、思考の習慣における不完結性にある。思考の習慣の不完結性には、空想、神秘主義、宗教、そして非現実的なものが含まれるが、一貫して共通しているのは、現実世界の進歩的、積極的な仕事への関心がないことである。つまり患者は、労働に適した習慣を持たず、非現実的なものを好む習慣を持つとされる。マイヤーにあつては、このような労働意欲の欠如という習慣こそ、早発性痴呆症の具体的表現であり、その特徴であると見なされていたのである。

以上のように、マイヤーによれば、早発性痴呆症を筆頭格とする精神疾患の多くは、非現実的な思考の習慣によって特徴づけられる。患者はこのような習慣を強化する傾向があり、ますます現実への適應ができなくなる。この現実社会への不適応から、患者は早発性痴呆症と診断される。この障害を生じた原因が非現実的な習慣にあるがゆえに、治療としてはその非現実的な習慣の克服、現実に適應する習慣の回復を目指すことが眼目となる。つまり、非現実的な思惟から、現実世界に適應する習慣の再構成・再確立への転換が要求されるのである。こうした「習慣訓練(habit training)」[IV, CP2:428]を通して、現実に適應する習慣が再形成されれば、患者は正常に回復し、社会に適應できるようになると考えられたのである。

このように、マイヤーによれば、精神疾患の病因は、思考の習慣を含む、適應のための諸習慣を次第に破壊・悪化させたことによる場所が大きい。したがって、マイヤーの病因論に基づけば、患者が正常に回復するための治療法は、正しい習慣の再確立、「再適應(readjustment)」ができるようになることであり[VII, CP4:360]、すなわちマイヤーのいう「習慣発達(habit development)」と「習慣療法(habit clinics)」以外にありえないことになる。

4. 家族と学校

すでに述べてきたように、マイヤーにとって、既存の家族と学校は、一部の子どもの習慣を破壊し、さらには社会への不適応という問題を生じさせる。また、精神疾患の予防と治療のため、習慣訓練が提唱された。しかし彼は、家族と学校の状況を改善しない限り、精神病院がいかに努力しても、家族と学校において、精神疾患が再生産され、精神疾患の予防は成功しないと考えるに至る。それゆえ、彼は精神病院と家族および学校との間にある障壁は打破すべきであると鼓吹し、家族と学校を精神衛生運動の主戦場と見なし、精神医学による家族と学校の改造を構想するようになる。それがすなわち、精神衛生運動にほかならない。

A 家族

マイヤーは、1930年に国際精神衛生運動の端緒とも言われる第1回国際精神衛生會議において、彼の家族観を披瀝した。まずマイヤーによれば、家族は生物学的かつ社会的にみて極めて古い組織であるが、努力と展望を無くしては、順調に機能できない組織である[XII:520]。実は、こうした考えは早期の子ども研究においてすでに現

れている。「家族は、ほとんどの場合、子どもを傷つけてしまいがちな場である。有益な学校で訓練を受けても、子どもは無知な両親によってすばやく元に戻される」[II, CP4:334]。また、彼は自らの家族の体験に基づきながら、幽霊譚を用いて、子どもを怯えさせることが、子どもの睡眠を妨害し、さらに精神的なダメージを与えているのだと告発し、こうした不安を煽る教育方法に強い不満を表明している [I, CP4:327]。

こうした思いもあって、マイヤーは精神衛生運動による家族の改善を訴え始めた。まず彼は、家族が子どもの「性格(character)形成」における基礎的発達を促す具体的な機会を提供する場だと考えた [X II:520]。というのは、マイヤーにおいては、「相互的な教育組織」としての家族は、「共有された体験と特性の十分な結合」を通して、子どもに情愛と寛容、団結について、試練を提供するものだからである [X II:520]。

その際マイヤーは、家族と学校の役割を明確に区別している。曰く、学校はより広い社会化のために選択された環境を提供する場であるが、家族はあくまで個人的な経験、習慣、見解によって、個人的な性格そのもの、すなわち「個」の形成の場にほかならない [X II:520]。もちろん、マイヤーにとって、家族における個の形成の目的は、よりよい社会の形成に置かれている。社会も文明も無制限な混乱、またいかなる純粋個人主義とも共存できない。そこで彼において、家族は社会的に要求されるものを育てるべく、そのための「訓練(training)」のプロセスを提供する場となる [X II:522]。

ここでいう「訓練」のプロセスとは、マイヤーのいう「習慣訓練」にほかならない。子どもを社会化するには、家族で幼年期から習慣訓練することによって、大いにその成果を期待できるというわけである。「始めから理解されていなくても、早期に身に付けた習慣と行動原理は、人格の構成において、最も実効的な原則として残る」[I, CP4:327]。彼は、幼い子どもの素晴らしい「適応性」、「可塑性」に着目し、適切に子どもを習慣訓練すべきであると力説する。なぜならば、子どもの心に、「正直、忠実、および安定の種子が播かれなると、肥沃な土に雑草が生える」からである [I, CP4:327]。いうまでもなく、このような習慣形成論は、西洋の伝統的な「習慣言説」の系譜に連なるものである²⁰。

しかし、家族における親の手に、適切な「種子」がなければ、子どもの習慣訓練は不首尾に終わる。そこで、家族に対する精神医学的指導が不可欠になる。とはいえ、精神医学が家族に直接介入するのは容易ではなく、マイヤーが構想したのは、精神疾患の「予防」を旨とするコミュニティの建設である。20世紀初頭の社会問題を背景に、マイヤーは、アルコール中毒と梅毒の予防を達成する有効な対策として、「教育プログラム」を打ち出し、親は訓練された教師から再教育を受けることによって、こうした精神疾患の予防が可能になると述べるに至る [VI, CP4:193]。

しかし、当然ながら、主に親を対象とする「予防」のための教育プログラムは、一般の学校では直接実施できないので、ここでさらにマイヤーは、予防教育を実施するための、「精神衛生地区(mental-hygiene districts)」の建設を提唱する。この「精神衛生地区」こそが、新しい人間形成の理想郷建設の核心に位置づく。彼は、理想的には、「できるだけ多くの地区が、家族世帯それ自体から、完全に合理的に作られた組織でなければならない」とし、地域の中心

にある「学校」を模した、地域全体の精神衛生を啓発する「精神衛生地区」を構想したのである [VI, CP4:196]。

この構想は、そのすべてが実現されたわけではなかったが、当時の精神衛生運動に強い影響を与え、それは公衆衛生に貢献しようとする精神科医たちの考えを「象徴」するものであったと言われている²¹。しかも新しい「精神衛生地区」を建設するにあたり、マイヤーが参照した重要なモデルは「学校」であった。20世紀アメリカ教育の特徴として、精神医学による「教育の医療化」を指摘できると同時に、それは「精神衛生の学校化」によっても担われていたのである。精神衛生に関する考え方や理念を社会の隅々にまで浸透させるために、「精神衛生の学校化」が推し進められ、その最善の方法として、地域の中心に「学校」をモデルとした「精神衛生地区」を建設することが求められたのである。

この「精神衛生の学校化」の動きは、「教育の医療化」と相互補完的であり、かつその構想の核心に据えられていた。精神衛生における予防事業では、公教育による啓発活動が最重視され、そのような場として学校のような施設が最もふさわしいと考えられていた。予防教育は、表面的には、親を直接的な対象としていたが、マイヤーも指摘しているように、それは子どもをも念頭においたものであった。「成人集団における改善がなければ、われわれは、若者が学校教育だけで変化すると期待してはいけぬ。子どもは彼らが学校でさせられることよりも、自分達が見て、聞くものから学ぶものである」[VI, CP4:194]。つまりマイヤーにとって、精神衛生コミュニティの建設による親の改善は、結局、子どもの精神衛生をも見通した構想でなければならなかった。親が改善されれば、家庭環境も改善され、子どもは、マイヤーのいうような正しい習慣発達ができるようになることと期待されていたのである。

以上のように、マイヤーは、家族の教育のために、学校をモデルとした「精神衛生地区」を建設しようとしたが、具体的には、どのように「学校」を捉え、新たな理想像を描いていたのだろうか。次項では、マイヤーの学校観に迫っていくことにしよう。

B 学校

すでに検討しておいたように、マイヤーにとって、家族の教育のために「学校」がコミュニティ建設のモデルとされていた。彼は精神衛生の理念を普及するために、学校の役割を非常に重視していた。既述したように、「精神衛生の理念」がすでに学校へと浸透しつつあった1916年、彼はシカゴに設置された教育関連委員会で講演を行い、「精神的かつ道徳的健康を達成すべく、学校が貢献できることをやるうではないか」と呼びかけた [VII, CP4:351]。その中で、マイヤーは、「学校と医学の両領域で作られる偉大な進歩のために、教育者と医師にはより多くの共通基盤があると強く感じる」と語り、精神医学の関心が学校へと照準を定めつつあったことを如実に伝えている [VII, CP4:351]。では、マイヤーにとって、学校は精神衛生において、一体どのように位置付けられ、どのような役割を果たすものと考えられていたのだろうか。

まずはマイヤーの学校観を明らかにしておこう。子どもの知的、道徳的発達における障害を克服しようと考えた際、彼は教育に対する考え方を、次のような二つの立場に大別してみせる。「一方は、すべての欠点が特別な訓練によってできるだけ取り除かれることを原

則とし、著しい欠陥もなく、均整のとれた存在になるべくすべての子どもを訓練し、教育するという理想を正当化しようとしている。もう一方の視点は、先回りして配慮する、過度の教育的保護主義ではなく、子どもの才能に応じて成長させることである」[I, CP 4:323]。

彼がこうした考えを示したのは、19世紀の末、進歩主義教育運動が徐々に進行しつつあった時期と重なっていた。彼の議論からは、学校教育をめぐる新旧の認識の対立が読み取れる。当時の教育界の思潮を反映して、学校教育では二つの立場が対立し合っているという認識である。この二つの相対立した立場は、デューイによる新・旧教育観についての概括と一致している。同じように、その後に進歩主義教育運動の旗手となるデューイは自らの立場を表明するために、「教育理論の歴史は、教育は内部からの発達 (development) であるという観念と、教育は外部からの形成 (formation) であるという観念の対立によって、また、教育は自然的素質に基づくという観念と、教育は自然的性向を克服し、その代わりに外的圧力のもとに獲得された習慣 (habits) を形成する過程であるという観念との対立によって特徴づけられている²²⁾」と述べている。

つまり、一方は、人間の発達は外部からの訓練によって実現されるという観念であり、マイヤーの言葉を借りれば、「すべての欠点が特別な訓練によってできるだけ取り除かれること」が目標であり、すべての子どもはこの目標にしたがって訓練を受けなければならないとする考え方である。このような、子どもの成長にとって、自然的性向を克服するために、外部からの訓練、「習慣形成」を強く要求する立場が一方にある。しかしもう一方には、人間の成長は根本的に内部から自発的に起こると考える立場がある。これは、マイヤーのいう生まれつきという意味での「才能」に対応しており、子どもを自発的に成長させるとする考え方である。この立場では、子どもそれぞれの「才能」あるいは「自然な素質」が異なるという前提に基づいて、内部からの自発的な発達が決定的な要素となるというのである。

このような新旧教育観の対立を前に、マイヤーは、教育者による強制が子どもに「過労」をもたらすことを強く非難し、「子どもの特性に即したカリキュラムの適用が必要だ」と主張する [I, CP 4:323]。彼はカリキュラムの画一性に反対し、特別に聡明な子どものために個人講義が必要であるとし、個々の子どもの特性を重視した教育カリキュラムの必要性を喚起している。

しかし他方で、1922年に進歩主義教育協会に招かれた講演では、「子どもを扱う際、われわれは習慣発達を強化しなければならない」とも述べ、「外部」からの子どもの「管理、矯正、および通常の抑圧の方法」を次のように捉えている [IX, CP 4:405]。「最も重要な点は、環境と調和し、欲求を充足させる、十分な機会を完全に保証する習慣発達にある」[IX, CP 4:405-406]。したがって、マイヤーにとって、まず子どもの「さまざまな気質に合う環境」が提供されなければならない。このような環境を提供するのは学校にほかならない。こうした主張は、既述した彼の1916年にシカゴでの講演と一脈通ずる。つまり、学校は子どもにおける「習慣発達」の場であり、「学校生活の期間は、それ以前の幼年期に獲得された習慣がより確実に形成される時間」となるべきなのである [VII, CP 4:355]。

ここで、少なくとも教育における習慣発達の重要性は、マイヤー

にとって自明の理として措定されている。なぜ彼は、治療的にも、予防的にも、「習慣発達」を重視していたのだろうか。この「習慣発達」概念は、外側からの形成が必要とする「習慣」と、個体と環境との絶えざる相互作用の中で理解される成長としての「発達」とを結合するものである。この概念においても、デューイの教育哲学から示唆があったことはいうまでもない。マイヤーのシカゴ講演の年は、デューイ教育哲学の集大成、『民主主義と教育』が刊行された年でもある。そこで「教育が発達である」とデューイが述べた際、発達とは「特殊な方向に能力を指導すること、すなわち、実行的腕前、はっきりした興味、観察と思考の明確な目的を含む習慣を形成することを意味する」(傍点筆者)と主張されている²³⁾。こうした発達と習慣の不可避の結びつきは、マイヤーにとって、「正常な子ども」の発達のみならず、精神疾患の治療・予防にも有効とされる。学校生活は、子どもが獲得した習慣が確実に形成されるようにする期間であり、学校はその意味において、マイヤーのいう「習慣発達」の場であると同時に、そのことにより精神疾患をも治療・予防する場でもあるのである。

さらにマイヤーは、精神衛生における習慣発達が順調に行われるために、家族において親の再教育が必要なと同様、学校教師に精神衛生論を受容させるべきだと主張する。精神科医の指導を受けた教師は、医者のように、生徒たちが直面する「生の不調和」を克服すべく支援しなければならない [VII, CP 4:367]。教師は、平静で毅然とした対応と、柔軟な管理の模範でなければならないのである [VII, CP 4:368]。

このような精神衛生に通暁した教師像を塑造しながら、マイヤーは、精神衛生における学校の役割と責任を強調する。彼によれば、社会における「精神的、道徳的な衛生」の任務を実現するために、学校をコミュニティの中心に置かなければならない [VII, CP 4:369-370]。なぜならば、学校は、まず家族の教育のためのコミュニティにおいて、精神衛生地区の模範であり、また、子どもの精神衛生のための習慣発達の重要な場でもあるからである。彼の言うところの、「健康における普遍的な連帯意識」という原理に基づけば、教師と両親との密接な連携、子どもを規律化することは、コミュニティの中心となる学校においてこそ、実現可能なのである [VII, CP 4:370]。

事実、1925年、精神衛生運動の学校教育への介入によって、社会改造の「成果」は現れ始めた。マイヤーは、この年のソーシャル・ワーカーの全米協会の大会で、「今日、すべての行動上の問題に対して、学校と親との連携を求めるという普遍的な自覚が確立された。習慣診療は発展し、そして、国家精神衛生委員会は非行の防止という名の下、児童相談所を設置することを可能にした」と慶賀していた [X, CP 4:258]。マイヤーはこうした状況が、「真の健康、幸福、効率、および社会適応というニーズを達成することに向かっている」証であると確信したのである [X, CP 4:258]。だが、その意に反して、今日に至るまで、新たな「心」の病がますます枚挙に暇なく登場し、社会に適応できない子どもが後を絶つ気配はない。

以上のように、マイヤーに即して、20世紀初頭のアメリカにおける精神衛生運動について検討していくと、なぜ彼をはじめとした精神科医たちが、この運動を通して、家族と学校の役割を重視し、両

者の連携を深め、教師と医師に共通基盤を求めようとしたのが、次第に判然となってくる。精神衛生論者は、「精神的かつ道徳的な健康」という旗印の下、家族と学校をその主戦場と見定め、精神医学の指揮の下、「学校化された病院」、あるいは「病院化された学校」を建設しようとし、教育を医療化しようと努めたのである [V, CP 4:349]。さらに学校は家族教育のための模範であると同時に、コミュニティの中心とされ、精神衛生という見地から、学校教育による社会改造が企図されていたのである。しかし、その治療と予防法は、個人と社会適応の問題を解決する方法として、本質的に「習慣」形成論の枠組みに依拠し、その域を出るものではなかったのである。

5. 小括

以上のように、精神衛生運動史を背景に、これまで教育学の視点からほとんど取り上げられてこなかったマイヤーの精神衛生論と教育言説を考察し、その教育観を析出することを試みた。本稿において明らかにした重要な点は、マイヤーのいう精神医学の使命と役割、その治療と予防法の本質、そしてなぜ実際に家族と学校をその働きかけの主要な場としたのかという点である。それはまた、マイヤーに即して、「教育の医療化」を生じさせた歴史的経緯をも具体的に明らかにすることにほかならなかったわけである。

まず、プラグマティズムの影響を受け、マイヤーの精神医学が「精神生物学」の立場を取りながら、「心」と「身体」を統一的に取り扱う、人間の「生」を配慮する総合的な学問であろうとしたことが明らかとなった。したがって、精神医学が扱う領域は、人間生活のほぼあらゆる局面にわたり、その目標はよりよく社会を改造することに置かれていた。精神衛生運動は、当時の人々の「健康、喜び、効率、社会適応」というニーズに応えようとするものであり、「進歩主義教育運動」と同様、社会改造運動そのものだったと言ってよい。さらに、そうした精神衛生の目標を実現するために、精神衛生論者は家族と学校をその主戦場と見定めたのである。

では、なぜ家族と学校が特に注目されたかといえば、「早発性痴呆症」をはじめとした精神疾患は、成育環境、つまり家族と学校によって、習慣が破壊されたことによって生じていると認識されていたからにほかならない。この習慣破壊の結果、患者は社会への適応する術を失った。したがって、一方では治療法として、社会適応の習慣を再発達させることが目指され、他方では予防法として、精神疾患を根絶すべく、その成育環境、すなわち家族と学校を精神衛生という観点から改革しようとしたわけである。

マイヤーは、家族と学校の改善策を具体的に提示していた。精神疾患の予防のために、まず対処すべき場は家族である。家族は単に親が子どもを教育するのみならず、精神疾患の予防と子どもの教育を行うべく、親もまた精神衛生という見地から再教育される必要があったのである。マイヤーにあっては、家族は個人の「性格形成」、「習慣形成」を実現する機関であり、個人の成長にとって、習慣訓練を提供する場であった。

また、マイヤーが親を再教育するために、学校をモデルとした「精神衛生地区」というコミュニティの建設を提案したことに端的に現れているように、彼が最も重視したのは学校であった。マイヤーにとって、学校は、一方では子どものさまざまな気質に合う環境を提供する場であり、他方では、子どもにおける「習慣発達」の場でも

あった。精神疾患の予防が習慣発達によって可能であると見なすマイヤーは、学校を適切な習慣発達のとすべく改善しようとした。その上で、精神衛生論を教師に浸透させ、まさに精神科医のエージェントとしての新たな教師像が作り上げられていくことになる。精神衛生の目標を実現するために、精神医学と学校教育との連携が強化され、学校がコミュニティの中心として精神衛生を向上させるよう求められた。このように、マイヤーは、従来の家族形態と学校教育を批判し、精神衛生という視野に立って、子どもの精神障害の克服と社会適応のために、習慣発達を全面的に援用したのである。

以上のような歴史的考察を踏まえてみるなら、マイヤー率いる精神衛生運動が、「教育の医療化」の直接の契機であることは言を俟たない。精神衛生運動による「教育の医療化」は、一見したところ人間形成、また学校教育をより科学的に「健康」へと導いたように見えるが、その内実はずでに17世紀末葉、「教育(Education)」にとって最も心すべきことは、どんな習慣(Habits)をつけるかということである²⁴⁾(傍点、原文イタリック)と断言しえたジョン・ロックに端的に表れているような、「習慣形成」を旨とする伝統的教育観の精神医学的焼き直し、その再燃にはほかならなかった。大衆の求める「心」の健康に応じて、精神衛生論者は心の専門家として問題を解決するかに見せかけながら、実際には、人々を現実社会が課すところの慣習にうまく適応させることへと議論をすりかえてしまった。その際、精神衛生運動が採用したのは、すでに伝統的教育手法ともいえる習慣形成であった点は特筆すべきである。マイヤーの習慣発達論は、子どもの不適応を可視化し、子どもを社会に順応させることを狙い、教育を医療化する端緒となった。それは社会改造を標榜しながらも、既存の習慣を「訓練」によって内面化させることを旨とする、教育による社会適応論であった。こうしたマイヤーの議論を考察することは、今日における教育の医療化を再検討する契機となりうる。さらに、今後、精神衛生運動という観点から進歩主義教育運動の歴史的意義をより精細に描きなおす必要性もでてくるに違いない。

¹ 多くの研究者が指摘するように、西洋社会では医療化が進展してきている。「医療化」について考察した代表的なものとして、I. K. Zola の 'Medicine as an Institution of Social Control,' *Sociological Review* 20, 1971 (pp. 487-504) ; P. Conrad, 'Medicalization and Social Control,' *Annual Review of Sociology* 19, 1992 (pp. 209-232); S. J. Williams, 'Sociological Imperialism and the Profession of Medicine Revisited: Where are We Now,' *Sociology of Health and Illness* 23, 2001 (pp. 138-158)がある。P. Conrad によれば、医療化は医療か脱医療かの二者択一の問題ではない。医療化とは常にこの二方向の過程を辿りうる。

² ADHD に関し、その医学的妥当性を問う研究が、近年現れている。Timimi, S., *Pathological Child Psychiatry and the Medicalization of Childhood*, Brunner-Routledge, 2002

³ 藤本修『メンタルヘルス』中公新書、2006年24頁

⁴ ウィンズロー「精神衛生運動とその創始者ピーアス」、17頁 (C. W. ピーアス『わが魂にあふまで』加藤善佐次郎、前田則三訳、羽田書店、1949年所収。)

⁵ Cohen, S., 'The Mental Hygiene Movement, the Development of Personality and the School,' *History of Education Quarterly*, vol. 23, 1983, p. 124

⁶ Winters, E. E., 'Adolf Meyer's Two and a Half Years at Kankakee,' *Bulletin of the History of Medicine*, vol. 40, 1966,

- pp.441-458; 'Adolf Meyer and Clifford Beers, 1907-1910,' *Bulletin of the History of Medicine*, vol.43, 1969, pp.414-443
- 7 Leys, R., & Evans, R. B., *Defining American Psychology: the Correspondence between Adolf Meyer and Edward Bradford Titchener*, Johns Hopkins University Press, 1990; 'Types of One: Adolf Meyer's Life Chart and the Representation of Individuality,' *Representations*, vol.34, 1991, pp.1-28
- 8 国家精神衛生委員会(NCMN)の成立と発展に関して、精神衛生運動とマイヤーについても考察したものと、J. C. Pols の *Managing the mind: the culture of American mental hygiene*, Ph.D. Dissertation, University of Pennsylvania, 1997 がある。
- 9 日本におけるマイヤーの影響を簡潔に取り上げているものとして、岡田靖雄「戦前合衆国に留学した精神病学者たち」『日本医史学雑誌』第40巻4号、1994年；妙木浩之等「草創期における日本の精神分析」『精神分析研究』第48巻、2005年がある。しかし、精神衛生運動において、マイヤーが教育に与えた影響について、論じられているものはほとんどない。
- 10 Cremin, L. A., *The Transformation of the School*, Alfred A., Knopf, Inc., 1961, Vintage Books Edition, 1964, p.247
- 11 クレペリンが命名したものであり、精神分裂病 (schizophrenia) の古称。現在では「統合失調症」と称す。
- 12 Cohen, S., *Challenging Orthodoxies: toward a New Cultural History of Education*, Peter Lang Publishing, 1999, p.187
- 13 Meyer, A., *The Collected Papers of Adolf Meyer*, edited by Eunice Winters, Johns Hopkins University Press, 1950-52
- 以下、本文中の [] 内は、下記論文の番号 (ローマ数字)、著作集巻数、頁を指示する。
- I 'On the Observation of Abnormalities of Children,' 1895, CP4
- II 'Mental Abnormalities in Children during Primary Education,' 1895, CP4
- III 'Schedule for the Study of Mental Abnormalities in Children,' 1895, CP4
- IV 'Remark on Habit Disorganizations in the Essential Deteriorations, and the Relation of Deterioration to the Psychasthenic, Neurasthenic, Hysterical and Other Constitutions,' 1905(1912), CP2
- V 'What do Histories of Cases of Insanity Teach Us Concerning Preventive Mental Hygiene during the Years of School Life?' 1909, CP4
- VI 'Where Should We Attack the Problem of the Prevention of Mental Defect and Mental Disease?' 1915, CP4
- VII 'Mental and Moral Health in a Constructive School Program,' 1917 (1925, 1946), CP4
- VIII 'The Contributions of Psychiatry of the Understanding of Life Problems,' 1921, CP4
- IX 'Normal and Abnormal Repression,' 1922, CP4
- X 'Individualism and the Organization of Neuropsychiatric Work in a Community,' 1925, CP4
- XI 'Genetic-Dynamic Psychology Versus Nosology,' 1926, CP3
- XII 'The Family Setting,' 1930, Lief A., *The Commonsense Psychiatry of Dr. Adolf Meyer*, Mcgraw-Hill Book Company, Inc., 1948
- XIII 'Psychiatry- Its Meaning and Scope,' 1942, CP3
- 14 Beers, C., *A Mind that Found Itself*, Garden City, N.Y.: Doubleday, 1935, p.263
- 15 Henderson, D.K., 'Introduction,' in CP2: p.xvii
- 16 加藤正明等編『精神医学事典 (縮刷版)』弘文堂、2001年、904頁
- 17 デューイの道具主義は、従来の心身二元論を批判するものであり、プラグマティズムの心身観は、心身二元論の克服にある (魚津郁夫『プラグマティズムの思想』ちくま学芸文庫、2006年、237-238頁)。
- 18 マイヤーの心身観は、「生物学的全体主義」の立場とされ、彼のいう「精神生物学」に基づくものとされた。今田恵『心理学史』岩波書店、1962年、411頁；E. ショーター『精神医学の歴史』木村定訳、青土社、1999、140-143頁
- 19 Dewey J., *My Pedagogic Creed*, in *The Early Works* 5, edited by Jo Ann Boydston, Southern Illinois University Press, 1972, p.93
- 20 西欧思想史における習慣言説の系譜について、とりわけ、次のものに詳しい。寺崎弘昭「教育関係構造史研究入門」『東京大学教育学部紀要』第32巻、1992年、11-14頁
- 21 Dreyer, B.A., 'Adolf Meyer and Mental Hygiene: An Ideal for Public Health,' *American Journal of Public Health*, vol.61, 1971, p.1000
- 22 Dewey J., *Experience and Education*, in *The Later Works* 13, 1988, p.5
- 23 Dewey J., *Democracy and Education*, in *The Middle Works* 9, 1980, p.55
- 24 Locke, J., *Some Thoughts concerning Education*, edited with an introduction, notes and critical apparatus by W. and Jean S. Yolton, Clarendon Press, 1989, p.95
- (本研究の成果の一部は科研費(20530691)の助成を受けたものである。)